

編集室から

今月3日に節分を迎えます。本来、節分とは、立春・立夏・立秋・立冬の前日のことで、年に4回あるのですが、現在は立春の前日のみの呼ばれ方になっています。考え方によっては、この節分 - 立春を以って新年とも言われています。

ではカレンダーの1月1日と節分が何故ずれているのか？気になります。調べてみるとこれがまた、なんとも面白い経緯でした。

元来、暦とは農業のために創られ世界各地に独自のものがあつたそうです。現在世界共通で使用されている暦の大本は、紀元前にローマで使われていたロムルス暦だそうで、この暦には冬に月の割り当てがなく一年は10ヶ月。その後、ヌマ暦で冬季のふた月が追加されるも一年は355日。このため、頻繁にうるう月を入れて調整していたのが、役人の怠慢で大幅なずれに。

これを抜本的に正し一年を365日として4年に一度うるう日を入れると決めたのが、かのユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザー)で、その暦がユリウス暦。紀元前45年のことです。

その後、彼と次の皇帝の功績を称え、July・Augustという皇帝由来の月名が元の7月の前に挿入されてしまいます。語源的にはSeptemberは7、October・November・Decemberは、それぞれ8・9・10の意味なのに...

ところが16世紀にはまた暦と季節がずれてしまい、ローマ法王グレゴリウス13世によって春分の日が3月21日付近になるよう、現在のグレゴリオ暦に改定された結果の成り行きとして、現在の1月1日が決まった...という訳でした。

なんとも人間くさいというか、天文学などの学問的な背景がほとんど感じられない決まり方だったようです。でしたら「節分の深夜～立春が新年」の方が、はるかに根拠として納得しやすいと思ってしまうのですが...。(^^;ゞ(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2019/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

如 月



大雪の金沢にて
by hama

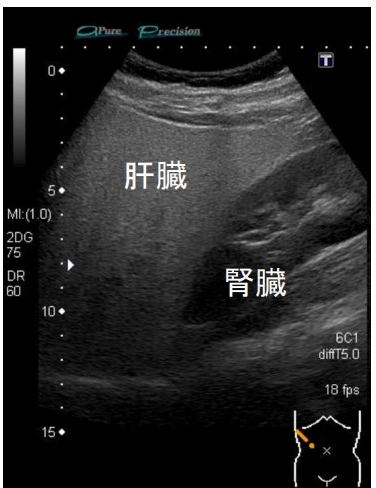
含まれる炭素の数によって脂肪酸は短鎖・中鎖・長鎖に分けられ、中性脂肪酸合成の材料になるのは炭素が十二個以上の長鎖脂肪酸だけです。炭素が八十個の中鎖脂肪酸や六個以下の短鎖脂肪酸は腸から吸収されると血中に単独で存在し、エネルギー源として速やかに利用されます。そのため中鎖脂肪酸を多く含むココナッツオイルは、健康食品として注目をあびるようになりました。でもココナッツオイルを多く摂れば健康になるという発想は、ちょっと違つようです。摂取エネルギーが必要量を上回つてしまえば、ココナッツオイルの中鎖脂肪酸が優先的に使われても、他のエネルギーが余つて結局は肥満になるだけです。これはEPA・DHAや、流行りの必須脂肪酸でも同様です。確かに必須脂肪酸は人体内では生成できませんが、厚生労働省ホームページで平成二十九年の国民健康・栄養調査を見ると、一日の平均摂取量はオメガ6が約10gでオメガ3も約2gと、一般的な推奨量をクリアしていません。必須脂肪酸は、様々な食品に含まれているからです。よほど偏食をしない限り、無理してまでエゴマ油を摂る必要性は無いということですよ。

何度も述べましたが、コレステロールの研究は大きく進歩しました。しかし中性脂肪は、動脈硬化を進めるメカニズムも対処法も判っていません。そして中性脂肪の部品である脂肪酸については、もつと判っていません。最もよく研究されて市販薬もあるEPA・DHAですら、有効性に疑問符がついたままです。中性脂肪の新規産生を抑えるとか細胞膜の柔軟性を高めるなどと言われていますが、介入研究では今だに結論が出ていません。前に述べた短鎖脂肪酸が細胞表面の受容体と結合して

信号を伝達するという発見も、実はまだ最近の話なのです。

最後に実例をお目にかけてください。これはヒトの超音波検査画像で、左上に見えるのが肝臓で右下の楕円形が腎臓です。超音波を当てると、中性脂肪が貯まった細胞は白っぽく見えます。腎臓は細胞内に中性脂肪を貯めないで、腎臓の黒さを基準にすれば脂肪肝の程度が判定できます。この方は、明らかに肝臓が白っぽい高度脂肪肝です。しかし、この方は肥満のない十八歳男性で飲酒もしません。そして血液検査では、中性脂肪もコレステロールも正常範囲内です。この方だけでなく、原因がよく判らない脂肪肝をよく目にするようになりました。脂肪肝の原因が、実は想像以上に多様であるからかもしれません。そしてこれも私の個人的な印象ですが、脂肪肝が重度な方は内臓脂肪の多い方と同じくらい、動脈硬化のリスクが高いように感じています。

脂質に関する話は、この辺にしておきます。脂質に関するまとめは、前々回の5項目で変わりありません。脂質に関する研究は、糖質よりかなり遅れています。特に中性脂肪は、血液検査と超音波検査を頼りしながら、手探りで診療が続いているのが実態です。



【プロフィール】
いがき としお（金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。）

濱のつぶやき 『想定外の畏』

本欄で、何度も恐れ・怖れにいて触れてきた。仕事柄、さまざまな方たちと議論・協議・調整・交渉を行う機会が多い。そんな現場で、頑迷に反対したり、特定の人物を貶めたりする発言にも出くわすことがある。しばらく伺っていると、その言葉たちの陰に、発言者の恐れが透けて観えてしまう。

未経験のこと、全く知らないことに携わるのは怖い。その怖れの出自は、生物としての種の保存欲求であることは、よく知られるようになってきた。人間もまた、動物の一種であるから、その欲求・本能が備わっている以上、致し方がない当然の現象でもある。

しかし、問題をより複雑・解決困難にする事態は、一見極めて正統に思える自分の発言・主張が、どんな感情から生まれてきているのか、皆目無自覚である場合に起きるようである。

怖いものは、見たくない。存在すらも否定し、完全に無いものとして扱った方が、気分的には楽である。このワナは、はまりやすい。

最近、この畏にはまり込んでしまったが故の社会的大事故が漸増しているように感じている。曰く、「想定外」。想定外の事態が発生してしまったときほど、人間が弱くなることは無い。想定していないリスクには備えが無いから、為す術がない。完全に無力になる。科学の知見を社会に適用しようとする際、「そんな（恐ろしい）事は起こらないだろう」と、想定から外してしまつと、「想定外の事態」が増える。結果、無防備になる事態が増加するという悪循環に陥っているのを知らないのは、当の本人だけである。その方がどれだけ恐ろしいことか。

恐れを持っていない人間が強いのではない。その人は、勇敢なのではなく、単に粗暴なだけではないか。本当のリスク・恐怖から目を逸らせ、安直な安心感に浸っているに過ぎないのかも知れない。

自分の心の奥底に潜む恐れの内容を認め、恐れというものを知り、見つめられる人は、強い。そして、そんな人物こそ、激動の時代を乗り越え、事を為して行く人のだと思ふ。

私は意思決定プロセス、集団心理学、コミュニケーション手法等の専門家ではないが、学生や社会人等を対象にグループワーク（ワークショップを含む）をコーディネートあるいはファシリテートする機会に恵まれてきた。グループワークの作法に関し、これまでの試行を経て、わかってきたこととまだまだ修行が足りないところが見えてきたので、本号からそれらをつらつらと述べてみたい。

授業では一科目内で必ずと言っていいほどグループワークを数回にわたりさせている。その狙いは、物事を多様な視点から考察し、そこから論理的に導かれる方向性を発見するというプロセスを、グループワークによって自然と身に付けさせること。一方で学生一人一人のアウトプットの質を高めるには、当然ながら個人ワークの方が最適であり、採点の必要もあって適宜この手法もまた授業に採り入れている。

学生は一般に、もともと枠にとらわれない柔軟な発想を持ちながらも、知識や経験の少なさ等から未熟なアイデアに留まりがちである。また、最近の学生のコミュニケーション能力については、一刀両断に不足しているという意見には与しないが、論理的なコミュニケーション能力に限ると少し物足りなく感じる場面が多い。そのような認識に立つ私は、学生にグループワークさえさせれば素晴らしいアウトプットが生まれるかもしれないというのは幻想に過ぎないと考えている。現に、能力の秀でた学生が個人で作成するアウトプットと、その学生が加わったグループのアウトプットは、ほぼ同じレベルに収まるケースが見受けられる。

（つづく）

今回は違う業界の最新ビジネスモデルについて紹介いたします。

日本にはプロ野球やJリーグをはじめとして、様々なプロスポーツリーグが存在します。例えばバレーボールのVリーグやラグビーのトップリーグはご存知の方も多いかと思いますが昨年は卓球までもがTリーグの名のもとプロリーグが発足しました。確かに、男女ともに世界トップ選手がいるわけですから当然と言えば当然ですよね。

これらプロリーグの収益源は、1.放映権、2.チケット・グッズ売上 の2つが主な柱です。

放映権については、一昨年Jリーグの放映権をイギリスのDAZN社が獲得したことで話題となりました。10年2100億円もの金額は、これまでのスカパーが1年50億程度だったことを考えると4倍以上の金額です。「黒船来襲」という見出しが紙面に踊りました。放映権料の分配が増えたことで、クラブ側はより良質な選手の獲得ができるようになり競技のレベルが上がり、リーグの魅力が上げれば更に放映権料も上がるというわけです。

もうひとつの柱、チケット・グッズ売上ですが、今回はここにイノベーションがあるようです。チケットやグッズ販売はホームチームに売上が計上されます。つまり、アウェーではお客さんがたくさん入ろうが実入りがなかったというわけです。しかし、バスケットのプロリーグBリーグが今年から取り入れたのが「アウェー試合のライブビューイング」です。Bリーグは北は北海道から南は沖縄まで46チーム存在します。ほぼ全都道府県という感じです。北海道の人が沖縄に応援に行くのは難しいですね。高校野球であれば地元の駅に設置された街頭テレビに集まって応援している光景をよくテレビで見ますが、それではビジネスになんかなりません。Bリーグでは地元の大きなライブ会場で、高精度の大型ビジョンと解説者の絶叫付きの大音響でゲームを中継しハーフタイムにはチアリーダーによる応援まである。ファンも野外ライブのごとく片手にビールで盛り上がる。1人4,000円のライブビューイングに1,000人以上のファンが集まるらしいのです。1試合あたりチケット売上だけで400万円。今まで0円だった年間30試合のアウェーゲームが1億2,000万円もの売上になるのです。

野外フェスがこれだけ盛り上がっている昨今を考えれば、何故今までどのプロリーグもやっていなかったの?とは思ってしまいますが、高校野球の応援団に始まり最近では八口ウィーンなど皆で集まって騒いでみたいなのが好きな国民の心理をついたうまいやり方だと思います。

僕が考えるに、おらが町の という概念はスポーツだけに限らず存在します。例えば、大学駅伝なんかもそうです。卒業して四半世紀たつのに正月に寒風吹きすさぶ湘南まで応援しにいったり。それまで知りもしなかったのに、地元が舞台のドラマ(まれ)に出た女優さんが出るドラマは全て録画したり。とまあ、僕だけに限らず多くの日本人は帰属先(心の帰属も含め)に対しての愛が強いようです。遠く離れた場所に長年住んでいても故郷を思うように。地域づくりの中でもU・I・Jターンといった定住人口を増やすことにとどの自治体も一生懸命ですが地域に定住させるだけでなく、「応援する」という観点も考えてほしいです。ふるさと納税なんていう、まやかしの支援システム(あれは全体最適を阻害する毒でしかない)でなくアイデア・経験・ノウハウで応援してもらい、ゆるやかに繋がっていく事で新たな収益源を生むモデルがつかれます。

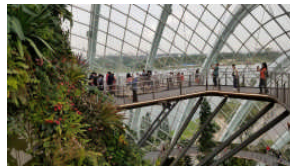
本当はここからアイドルビジネスにも話を展開したかったのですが(嵐の活動休止というニュースも有)それはまた次回に。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』シンガポールへの旅 2018.9.1~5
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

食後はマリーナベイに戻ってきてベイ・サウス・ガーデンに向かった。まずは目に飛び込んでく巨木、スーパーツリーだ。9~16階建ての高さに相当する、木の形をしたスチールフレームの垂直庭園だ。2つのスーパーツリーを結ぶ空中散策路を歩けば、植物園全体を見下ろせる。ただ、チケットを買ったまま登っていない、実に心残りだ。夜は、スーパーツリーに囲まれた場所でガーデン・ラプソディという音と光のスカイショーがある。これを空中散策路から見ようと目論んでいたが、20時でクローズになっていた。ああ。



ここには二つの巨大な植物ドームがある。小生が見たことのある地元浜松のフラワーパーク、フルーツパークなんて思ったら大間違い。まずは「フラワー・ドーム」に足を踏み入れた。涼しい！常夏の国のシンガポールが、高度な技術を駆使して、地中海や南アフリカやカリフォルニアなどの、冷涼かつ乾燥した地域の春を再現している。一段低いところにある大花壇を中心に、多肉植物の庭、バオバブの森、オーストラリアの植物、南アフリカの植物、南アメリカの植物、地中海の植物、カリフォルニアの植物、オリーブの森が囲む構成になっている。フラワー・ドームよりもさらに高さのある巨大なガラスのドーム「グランドフォレスト」の中に入ると、目の前には高さ35mの人工の山がそびえ、頂上からは人工の滝が流れ落ち、さらに山はミストの噴射によって作られた人工の雲に取り巻かれる。



山の周りはボードウォークがぐるぐると取り巻いており、頂上は標高2000mの設定になっている。エレベーターで6階まで上がってから、標高1000mの設定の低地まで、散策路を歩いて降りていく。高山の植物に覆われた山の外壁を見ながら、人工の雲の中を歩くことが体験できる。ここも見逃せない。

この日の夜はマリーナベイで20時から繰り広げられる噴水ショーを見なくてはと意気込んでいた。目の前で噴水を見るのは翌晩にとっておい

て、今晚は対岸からマリーナベイサンズが放つハイパーレーザーや建物のライトアップを楽しむことにした。15分ほどのショーで21時にもある。夜の楽しませ方も流石である。この後はホーカーズという屋台が並ぶ屋外で食事、ここではチリクラブと相性抜群の中国パンを添えた。チリソースにまみれたカニだから、箸やフォークで手におえる代物ではない。ビニル手袋が用意されているので手掴みでバリバリと食した。これも美味しい！この日はホテルに戻りプールで泳いで就寝、スマホの万歩計は2.3万歩を示していた。



三日目、シンガポール観光と言えばナイトサファリが有名だが、それは以前見たとして、今回は隣接したところに5年ほど前にできたリバーサファリを見に行くことにした。個々はホテルから随分離れている。公共交通はあるにはあるが、時間が一時間半ほどかかるとホテルのコンシェルジュが言う。タクシーならば30分で行けるとのこと、前述の通りタクシー料金は安い、ならばとホテル前からタクシーに乗った。幸いベンツEクラスで乗り心地よく現地に着いた。

奥深い川の世界を探訪するというリバーサファリはアジア初となる「川」がテーマの淡水水族館だ。世界を代表する大河の生態系の展示種類は200種6,000頭を超え、世界最大規模となり、淡水および陸生の動物を至近距離で観察することができる。まず現れる淡水生物ギャラリーではミシシッピ川、コンゴ川、ナイル川、ガンジス川、マレー川、揚子江、世界の大河流域に棲息するビーバー、ワニ、チョウザメ、オオサンショウオ、メコンオオナマズ等を見ることができる。次に現れたのが、何と「ジャイアントパンダ・フォレスト」。檻やガラスの壁がなく、パンダを間近に見ることができる。オスのカイカイが竹をむさぼっていた。笹を食べてるのかと思いきや竹の皮を剥いて竹をバリバリと音を立てて無心に食べている。何と1日20キロもの竹を食べるというのだ。パンダの次はワイルド・アマゾンというゾーンに入ってきた。ここにはアマゾンリバー・リクエストというアトラクションが待っている。アマゾン川流域の動物や鳥が住む森をボートで探検するという趣向だ。まずはボートが3メートル程上げられ、そこから下っていく、所々にミニ滝があり少しのスリルを味わいながら流れ落ちていく。見せ方がうまい。

世界最大の淡水水槽では巨大なマナティー、世界最大の淡水魚のピラルクも見ることができる。是非、行くことをお勧めしたいリバーサファリだった。(つづく)